

第 6 号

発行 黄檗宗青年僧の会「大阪の集い」の有志
教化布教紙研究会
霊龜山 九 島 禅 院
〒550 大阪市西区本田3丁目4-18
Tel 06-582-5772

仏心ある生活を!

さちあ

「一杯のかけそば」と仏教

布施とらうこ

「一杯のかけそば」という童話があります。札幌に住む栗良平という童話作家が、実話にもとづいて描いたんだそうです。

先頃、衆議院の予算委員会で公明党の大久保書記長が、リクルート事件に関して、この童話を引用し、金権体質の国会議員を追求したところ、濡れ手でア

ワの国会議員のセンセイたちの胸を打ったのか、議場はその時しーんと静まりかえったのだそうです。産経新聞でも報道され

感動の渦をおこしているのです。ご存じな方も多いことでしょう。実はこの話には、以前、息子

が、学校から帰ってくるなり、「感動したんや」とてもよい話だから、是非、お父さんたちも

読んでえや」といったので、記憶があります。学級の友達のお父さんが、この作者と友人で送ってもらったのを、担任の先

生が、プリントに印刷して、早速、子供たちに授業で紹介されたのだそうです。

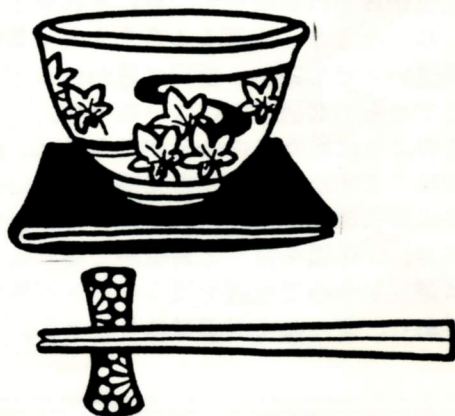
「一杯のかけそば」は、今から十五年ほど前の十二月三十一日、札幌の街にあるそば屋「北海亭」での出来事からはじまります。

大晦日の夜。客足もばったり止まり最後の客が出たところ、暖簾(のれん)を下げようとした時、十歳と六歳になる男子を連れて中年女性が入ってくる。

「あの・・・かけそば、一人前なのですが・・・よろしいでしょうか」

おずおずと言う女性の後ろでは、二人の子供たちが心配顔で見上げています。

女将は、暖房に近い二番テーブルへ案内しながら、カウンターの奥へ向かって、「かけ一丁!」と声をかける。



それを受けた主人は、チラリと三人連れに目をやりながら、「あいよ!かけ一丁!」とこたえ、ひと玉半をゆでて出す。

母子は一杯の年越しそばを三人で分けて食べた。額を寄せあって食べている三人の話し声がかうんたーの中までかすかに届く。

「おいしいね」と兄。「お母さんもお食べよ」と一本のそばをつまんで母親の口に持っていく弟。

やがて食べ終え、百五十円の代金を払い、「ごちそうさまでした」と頭をさげて出ていく母子三人に、「ありがとうございました!どうかよいお年を!」と主人夫婦が声をかける。

